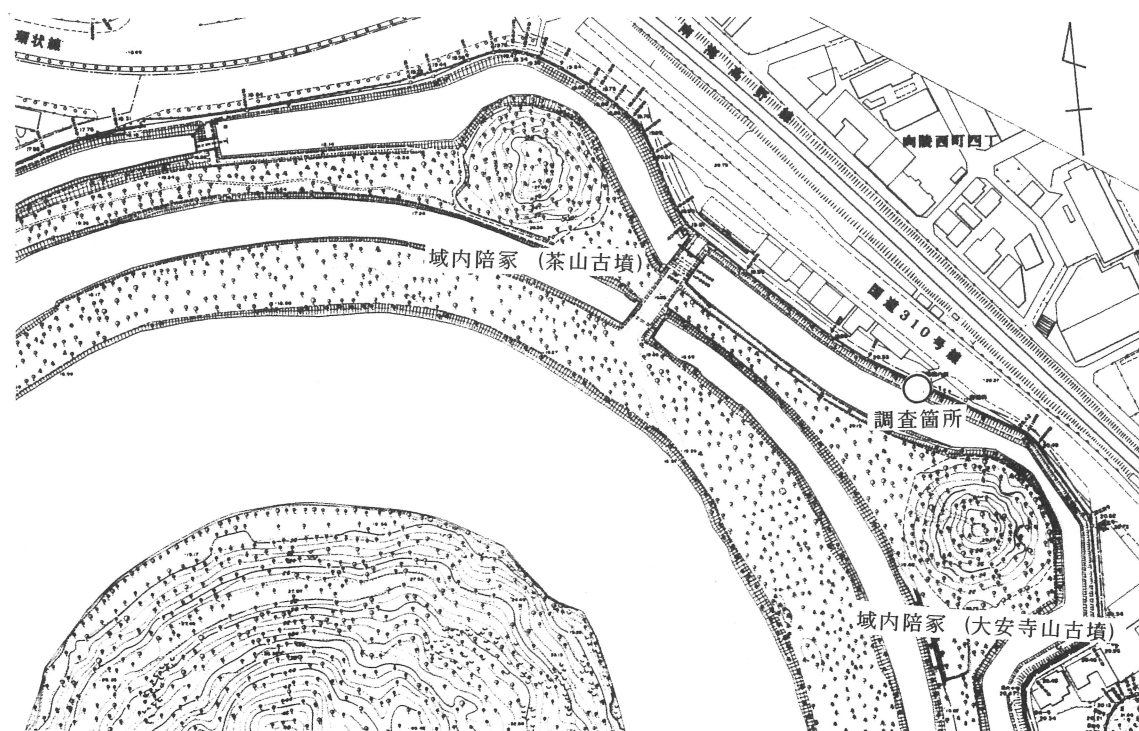


仁徳天皇 百舌鳥耳原中陵導水管設置工事に伴う立会調査

仁徳天皇百舌鳥耳原中陵は、わが国で最長の墳丘を有するとともに、現状で唯一3重の周壕がめぐっている陵である。本陵の周辺では市街化が進んできていることから、堺市によって健全な水循環を基本とした良好な水環境の実現を目的とした「仁徳陵・内川水環境再生プラン」事業が実施されてきた。この事業の一環として、芦ヶ池から本陵の第3濠への導水が計画され、水質・水量の改善と併せて水のネットワーク化を図ることとなった。そのため第3濠への新たな導水管が設置されることとなり(工事は堺市河川水路課が施工)、第3堤を開削することとなったため、掘削を伴う工事期間中に立会調査を実施した。調査は平成18年2月14日から17日までと、25日の埋戻し時に立ち会った。以下、その調査結果を報告する。

掘削した場所は第53図に示したように、城内陪冢(大安寺山古墳)のほぼ向かい側にあたる場所である。この外堤斜面を約3.5m四方をバックホーによって掘削し、もっとも深いところで約3mを測る(第54図)。この部分の土層断面図を観察すると、現地表面に近いところでは、厚さ30cmほどのまったく締まりの無い黒色土(I層)があり、この土層には空き缶、ビニール袋などが含まれることからきわめて新しい盛土である。その下の土層も締まりのない暗茶褐色土(II層)であり、この土層も近年の盛土であると判断した。その下のIII層とした土層は、I・II層に比べしまった土層であり、土色及び土質は下の地山と同様の明褐色を示す。すなわち、地山を削り出した土を盛りあげたと考えることができる。しかしながらこの土層には一切遺物が含まれておらず、この盛土がなされた時期を知ることはできなかった。そしてこの土層の下には地山との間に薄く黒色土(IV層)が堆積しており、旧表土であると判断した。しかしながらこの土層にもまったく遺物は含まれておらず、時期を知ることはできなかった。地山(V層)は、非常に堅く締まった土層であり、花崗岩砂粒を含むバイラン土である。

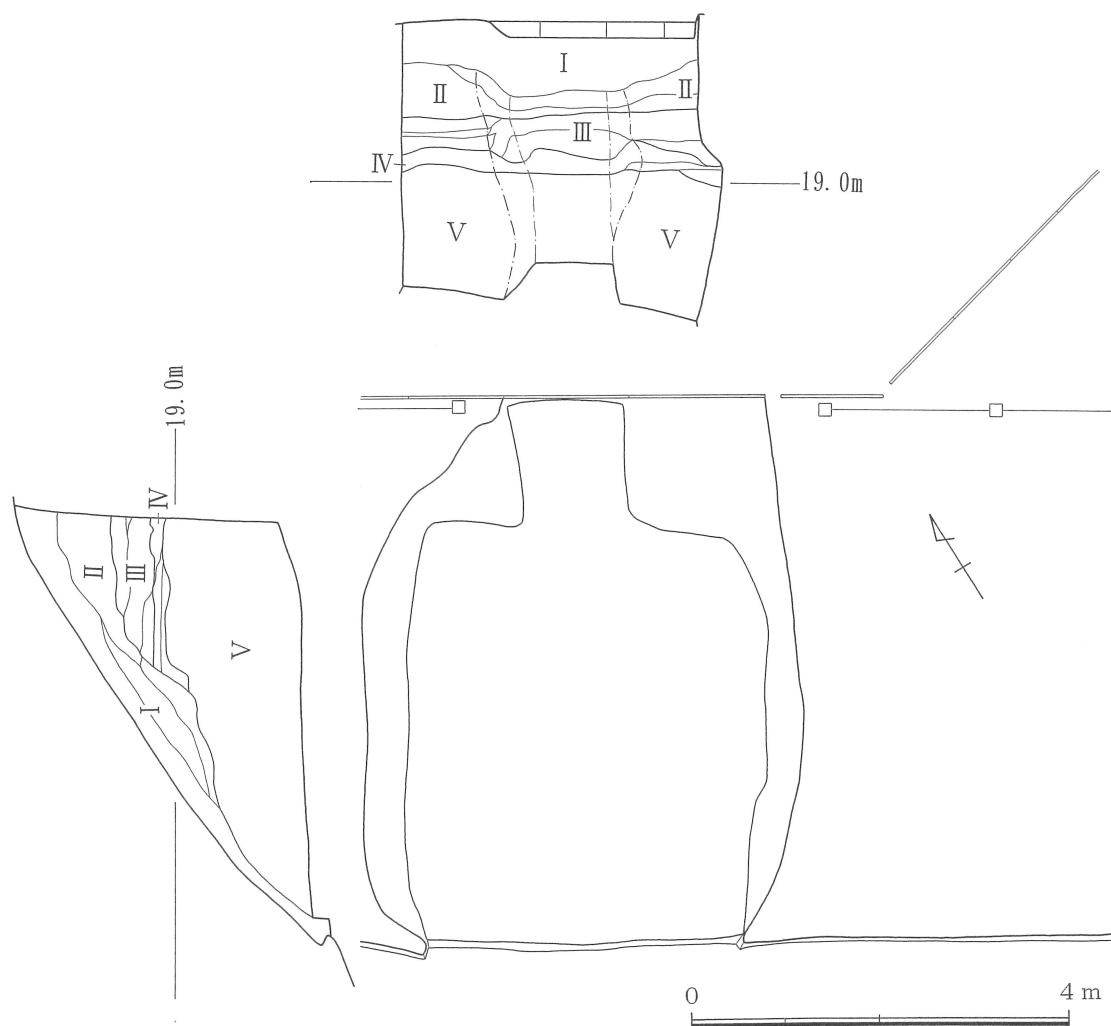
このように土層の観察結果から2回の盛土がなされたことは分かるが、特に地山の上に旧表土を挟んでなされた盛土については興味深いところである。すなわち本陵の第3濠については、明治30年代に開削された可能性が高いとされ、その際に現在当部が所蔵する、埴輪女子頭部などの形象埴輪が出土したと伝えられる。今回の掘削で明らかになった盛土が、この時のものであると判断できれば先の伝承を裏付けることとなるが、



第53図 百舌鳥耳原中陵 調査箇所位置図 (1/3000)

今回の掘削では1片の埴輪も出土せず、時期を判断するような資料はまったく得られなかった。

以上の調査結果のように遺構、遺物は出土しなかったため、工事は予定通り施工した。(徳田誠志)



第54図 百舌鳥耳原中陵 調査箇所平面図および断面図 (1/80)